写真１　SP10 弥生土器出土状況（南西から）

写真２　調査区北壁土層断面（SP4・6 付近）

写真３　SP10 出土土器１（文様部分）

報告書抄録	
ふりがな	わくいせき―だい13じはっくつちょうさほうこくしょ―
書名	和久遺跡　―第13次発掘調査報告書―
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第113集
編著者名	福井　優
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1　　TEL（079）252-3950
発行年月日	令和3年（2021年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
和久遺跡（わくいせき）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし）勝原区朝日谷字向田46番1（かつはらくあさひだにあざむかいだばんち）	28201	020338	34°48′53″	134°35′14″	2020.9.15～2020.9.19	17.0㎡	その他建物（木造2階建て）

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
集落跡	弥生時代	ピット・溝状遺構・不整形落ち込み・畝溝	弥生土器	20200276

例言

1．本書は、姫路市が社会福祉法人姫路睦福祉会の委託を受けて実施した、姫路市勝原区朝日谷字向田 46 番 1に所在する和久遺跡の発掘調査報告書である。
2．現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが実施した。
3．発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡例

1．発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果 2000）に準拠する平面図直角座標系第Ⅴ系を基準とし、数値はm単位で表示している。
2．本書で用いる標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
3．土色は、小山正忠・竹原秀雄編 2003『新版　標準土色帳　25 版』日本色研事業株式会社に準拠した。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第113集
和久遺跡―第13次発掘調査報告書―

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1
発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発 行 日　令和3年（2021年）3月31日
印刷・製本　株式会社デイリー印刷
〒671-0218　兵庫県姫路市飾東町庄57番地2

和久遺跡

―第13次発掘調査報告書―

調査区全景（北から）

2021

姫路市教育委員会

1　調査に至る経緯

姫路市勝原区朝日谷字向田 46 番 1 においてグループホームの建設が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である和久遺跡（県遺跡番号 020338、図 1）に該当する。そのため、事業の実施にあたり社会福祉法人姫路睦福祉会より文化財保護法第 93 条の届出がなされ、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。和久遺跡ではこれまでに 12 次にわたる発掘調査を実施し、多くの成果を得ている。今回はそれら既往の調査成果に基づき、工事の掘削により遺跡が影響を受けるエレベーターピット部分を本発掘調査の対象とした（図 2）。調査面積は 17 ㎡である。調査に際しては、姫路市と事業者で委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが現地調査（第 13 次調査、遺跡調査番号：20200276）や整理作業等を実施した。現地調査は令和 2 年 9 月 15 日に着手し、同年 9 月 19 日に完了した。調査終了後は出土品等の整理作業を行い、本書の刊行をもって本事業を完了した。

2　調査の成果（第 13 次調査）

調査地の現況は駐車場で、標高は約 5mである。基本層序は、アスファルト舗装版下の盛土を 2 層、旧耕土を 3 層とし、その下位には、地山と思われるにぶい黄褐色シルト層（9 層）、灰黄褐色シルト層（10 層）、暗オリーブ灰色砂礫層（11 層）が堆積していた（図 3）。

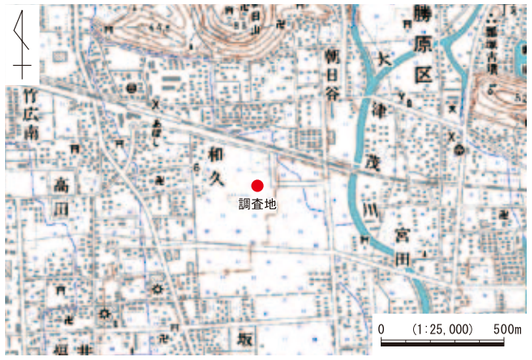


図 1　調査地位置図

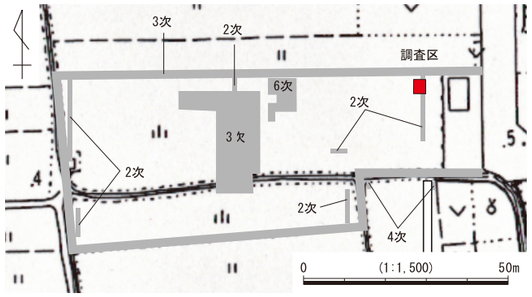


図 2　調査区配置図

今回の調査では、ピット 5 基（SP4 ～ 6・SP10・SP11）、溝状遺構 5 条（SD1 ～ 3、8・9）、平面形が不整形な落ち込み 1 基（SX7）を確認した。SP4 ～ 6 は平面円形で、径、深さはともに約 20cm である。埋土の特徴は SP10 に近似することから同様の環境下で埋没した可能性が高い。時期の比定に繋がる遺物は出土していない。SP10 は、平面円形で、径 20cm、検出面からの深さは18cmを測る。埋土は灰色を呈するシルト質で、斑状のマンガンが少量沈着していた。埋土の堆積状況や後述する遺物の出土状況から、柱穴である可能性は低い。埋土上面付近で検出した円礫の下から弥生土器が出土した（写真 1）。このうち図化が可能なものとして、弥生時代中期中葉の広口壺胴部上半（図 5-1）と甕底部（図 5-2）が挙げられる。1 の外面は一次調整である縦方向のハケメの後に、頸部中央付近から肩部にかけて施文されている。文様は、櫛歯状工具による直線文 4 段と波状文 2 条、竹管文である。櫛描き沈線のうち、上 2 段は近接して施されているが、2 段目と 3 段目、3 段目と 4 段目の間には 1.5cm 程度の間隔があり、沈線間に同じ工具による波状文が描かれている。そして、調整や文様等の切り合い関係から、土器を右回りにゆっくりと動かしながら施文していたことがわかる。これにより、見かけ上、工具は右から左へ約 3cm ずつ、断続的に移動したようにみえる。このように回転運動を利用しないうえに、櫛先の動きが不安定なために、本資料における波状文は不整美である。内面は、板状工具によって右下から左上方向に粗く掻き上げられている。胎土には径 1mm 大および 0.5mm 以下の石英粒、長石粒をやや多く含み、焼成は軟質である。なお、製作に係る痕跡以外では、焼成破裂痕や黒斑がみえる。2 の底部径は 5.4 cmに復元できる。器壁は粗いが、外面には縦方向の匙面状のミガキがわずかに残る。内面には下→上方向の粗い掻き上げがみえ、その上に煮炊きに伴うコゲが付着する。破面の観察により、底部は粘土塊を充填することで成形し、上げ底状を呈する。胎土には径 1mm 以下の石英粒、長石粒をやや多く含み、焼成は軟質である。

SP11 は調査期外へ広がるが、平面円形で、径約 20cm と思われる。埋土は後述する SD1 ～ 3 に近い。遺物は出土しなかったが、中世に帰属すると思われる。畝溝と思われるSD1～3は、幅約25cm、深さ約10～15cmの断面逆蒲鉾形を呈する。座標北とはほぼ直交している。営農時期を明確に示す遺物は出土しなかったが、法量や埋土の特徴は和久遺跡第 10 次調査で検出した畝溝群（姫路市教育委員会編集・発行 2020）と類似しており、概ね 13 世紀代のものと推定できる。SD8 は幅約 20cm、長さ約 90 cm、深さ約 15cm で逆三角形に近い断面形を呈する。埋土には既述の SD1 ～ 3 に近い土壌を径 5 cm大以下のブロック状に多く含んでいる。遺物が出土しておらず、性格も不明である。SD9 は、幅約 40 cm、深さ 5 cmを測る。やや不整形ではあるが、逆蒲鉾形の断面形や埋土は SD1 ～ 3 に近いため、検出当初は一連の遺構と認識していたが、平面形が不整形で、方向もやや異なるために別の遺構として取り扱っている。遺物が出土しなかったため、直接的に時期を示すものはないが、埋土の特徴から畝溝群と近い時期の可能性がある。SX7 は平面形が不定形なうえに遺物が出土しなかったため、遺構か否かの判断に迷ったが、断面形がしっかりとしていたために、性格は不明であるものの、人為的な営為の痕跡として認識するに至った。遺構の切り合い関係から中世以前に帰属すると思われる

3　まとめ

SP10 で出土した広口壺は弥生時代中期中葉に比定でき、当該地周辺では類例の少ない資料である。また、畑作に伴うと思われる畝溝は和久遺跡 1・10 次調査でも確認していることから、中世段階における当該一帯が広大な畑地であった可能性があり、周辺の土地利用を知るうえでの手掛かりを得ることもできた。

【引用・参考文献】香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会編集・発行 1964『紫雲出』、姫路市教育委員会編集・発行 2020『和久遺跡－第 10 次発掘調査報告書－　ツカザキ病院北館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査』姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第 91 集

1. アスファルト舗装版
2. 盛土
3. 旧耕土
4. 灰白色 2.5Y7/1 粘土…粘性・しまり弱い、9 層を径 1cm 以下のブロック状に少量含む【畝溝】。
5. 灰黄褐色 10YR5/2 シルト…しまりややあり、マンガンが上方に斑状に多く沈着、底面は不安定【性格不明】。
6. 灰色 7.5Y4/1 シルト…しまりやや強い、マンガンが斑状に少量沈着、比較的均質【ピット】。
7. 6 に近い【ピット】。
8. 灰色 5Y5/1 シルト…しまりやや強い、比較的均質【ピット】。
9. にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト…しまりやや強い、全体に少量のマンガンが斑状に沈着、均質。下方は径 2cm以下の円礫を稀に含む【地山】。
10. 灰黄褐色 10YR6/2 シルト…しまり弱い、比較的均質【地山】。
11. 暗オリーブ灰色 N4/ 砂礫…粗砂・径 5cm 以下の円礫が主体、径 10 cm 大の円礫を稀に含む、しまりやや強い【地山】。

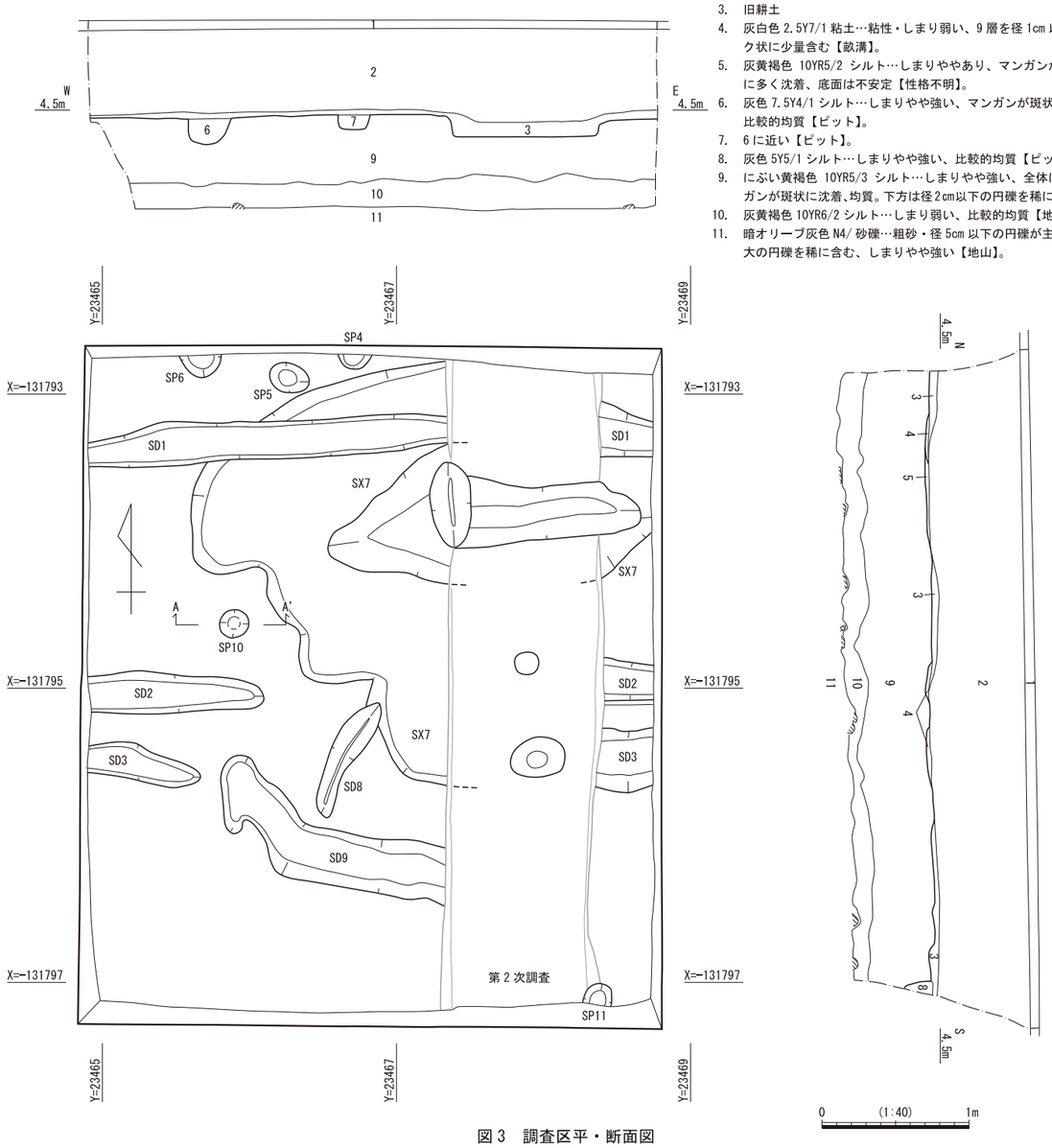
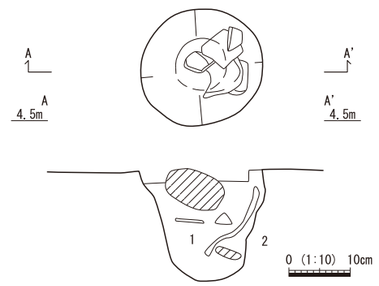


図 3　調査区平・断面図



1. 灰色 7.5Y4/1 シルト…しまりややあり、マンガンが斑状に少量沈着、径 5 cm・10 cm大の円礫を少量含む、弥生土器を多く含む。
2. にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト…しまりやや強い、全体に少量のマンガンが斑状に沈着、均質。下方は径 2 cm以下の円礫を稀に含む【地山】。

図 4　SP10 平・断面図

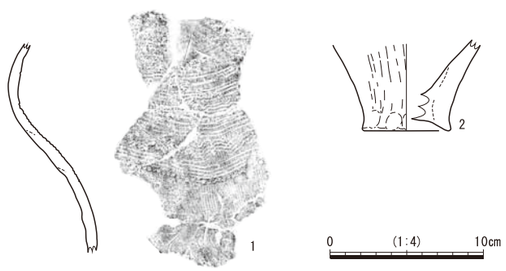


図 5　SP10 出土弥生土器